

「証言のゲーム」を攪乱する *Gulliver's Travels*における法批判と科学批判の連動

長谷陸

はじめに ガリヴァーによる法批判

ジョナサン・スウィフト (Jonathan Swift 1667-1745) の風刺作品である『ガリヴァー旅行記』 (*Gulliver's Travels* 1726) は、ガリヴァーが航海の果てにすっかり人間嫌いになってしまうという展開で知られる。すなわち、小人の国 Lilliput では、小人たちの愚かさを冷静に観察していたガリヴァーだが、巨人たちの国 Brobdingnag では、小人の国とは反対に、見下ろされる立場となり、自らの持っていた常識を相対化させられてしまう。最後にたどり着いた人間より賢い馬である Houyhnhnm の国において、ガリヴァーは完全に人間に絶望してしまい、容赦ない人間批判を繰り広げる。人間に絶望したガリヴァーの批判するものの一つに法律がある。ガリヴァーによる、裁判で決定された判例が徐々に法律になっていくイングランドのコモン・ローへの批判は従来あまり注目を集めてこなかった。しかし、法律に注目しながら、作品の全体を読み返すと、航海が進むごとに法が否定されていることに気づく。すなわち、小人の国では、法律が発展しているものの、ガリヴァーは法を運用する権力者の腐敗に苦しめられ、反対に巨人の国では、法律は簡潔であるが、賢明な君主がうまく国を治めている。そして最後の馬の国では、人間より理性的な彼らには法の必要性が理解できない。つまり、法批判は作品全体の展開と関わるテーマであることが分かる。本発表では、法批判に注目することで、『ガリヴァー旅行記』の新しい解釈を目指した。

イングランドにおける法と科学の結びつき

『ガリヴァー旅行記』において、徐々に法律が否定されていく展開が確認できるとして、では作者であるスウィフトは、馬の国のような法のない一種のユートピアが現実的にあり得ると考えていただろうか。このことについて考えるには当時のイングランドの科学的実践について考えなければならない。

スウィフトが生まれた王政復古期の科学知識を扱う社会学の最も著名な研究である『リヴァイアサンと空気ポンプ ホブズ、ボイル、実験的生活』によれば、この時代に「実験」という新しい営みが生まれた。この本は真空の存在を証明するために、空気ポンプによる実験を認めてよいかどうかを巡るホブズとのボイルの対立を通して、当時の科学の実践がどのようなものであったかを探っている。

この本によれば、ホブズは実験を否定する立場でした。当時の空気ポンプは数が少なく専門家にしか扱えない道具であり、実験も専門家集団にしかアクセスできないものでした。ホブズは専門家にしかアクセスできない実験結果を真理とは認めませんでした。彼の科学のモデルは幾何学であり、確実に論証を積み重ね、万人が納得せざるを得ないものが真理だったのだ。このような専門家集団を認めない彼の考えは一元的な権力を求める彼の政治哲学である『リヴァイアサン』と同型である。

それに対して、ボイルは実験を認める立場だった。彼は信頼できる目撃者がいる現象は事実だと認めてよいと考えた。また、実験結果を文章を通じて仮想的に目撃することもよしとした。目撃者が信頼できるほど、そして信頼できる目撃者が多いほど、実験結果も信頼できるものになるという彼の考えのモデルになっていたのは当時の法律だった。信頼できる目撃者がいる事実を証拠として有罪判決を下していた法の実践をボイルは科学に流用したのだ。社会学者の松村一志は、このような「裁判のレトリック」を用いた科学の実践を「証言のゲーム」と呼ぶ。

『ガリヴァー旅行記』は、明らかに架空の物語でありながら、現実に対する諷刺が忍び込んでいて、ガリヴァーは自らの語る物語を事実だと主張する。これは当時のイングランドの事実を認定する基準を混乱させる意図があるのではないか。そう考えて読み返せば、『ガリヴァー旅行記』では、法が否定されていくことに連動して、ガリヴァーが証拠を提示しなくなることに気付く。すなわち、小人の国から帰還する際には、証拠を持ち帰って来ているガリヴァーが、馬の国から帰還した際には、何の物証も見せない。これは法と科学が結びついた「証言のゲーム」の攪乱を意図していると考えられる。

スウィフトが科学への批判的な関心を抱いていたこと、『ガリヴァー旅行記』にもそれが表れていること、そして科学が風刺の対象であると同時に想像力の源泉であったことは、既に指摘されているが、それを法が否定されていくという一種のユートピア物語としての展開と結びつけることで、より正確な解釈が出来るのではないか。

「証言のゲーム」の攪乱

具体的に作品を分析すると、まず、ガリヴァーは小人国にたどり着く。ガリヴァーの観察では、この国の法律は発達しているものの、それを運用している人間が腐敗している。この国では、綱渡りに成功した人間が出世するなど奇妙な風習があり、それはウォルポールなど当時の政治家が風刺されていることが指摘されている。小人

の国でガリヴァーは、立ち小便で火事を消すという行為が国の基本法に違反しているとみなされるなどの事件が積み重なり、小人の国で危険視されついに死刑になってしまう。死刑が決定される際も法が要求する厳格な証拠もなしで決定される。眼球を潰し、その後餓死させられる計画を知ったガリヴァーは裁判に訴えることも考えますが、裁判官に頼るのは危険だと判断し、国を出て行くことを決意する。国を脱出して海を漂流していたガリヴァーを拾った船長は、彼が小人の国にいたという話を聞いて、初めはガリヴァーが狂っていると考えるが、彼が航海の食糧として小人の国から持ってきていた小さい牛と羊を見せるとガリヴァーの話が本当だと信じるのだ。この部分には二つの解釈が可能である。一つは「証言のゲーム」への批判であるという受け取り方だ。つまり、ガリヴァーと船長の二人の目撃者がいる以上は、「証言のゲーム」が成立する可能性があるが、複数の目撃者がいれば、小人の国のようなあり得ない話でも信じるのか、という Swift の皮肉である、という解釈ができる。もう一つは、小人の国はあり得ないようでいて、しかしガリヴァーがしっかり証拠を出していることを鑑みれば、法律を無視して証拠もないのに死刑を決定するような腐敗した国家は確かに存在する、という受け取り方も可能である。前者の解釈では科学が攻撃されており、後者の解釈では法が攻撃されていることになるが、どちらとも受け取れるようになってきているが、しかし法と科学が結びついていた以上は、どちらにせよ法と科学の双方に対する攻撃になっており、そもそもどちらとも受け取れるということ自体が、イングランド的な「事実」に対する攪乱になっている、と考えられる。このようにスウィフトは多義的な風刺を行い、しかも風刺が多義性を持っていることそれ自体がイングランド的な「事実」への風刺になっているのだ。

そしてついに最後の馬の国への航海でガリヴァーのイングランド的な文化からの離脱は決定的になる。乗組員たちに裏切られ、置き去りにされたガリヴァーはそこで会話ができる馬の Houyhnhnm に出会う。しかし、Houyhnhnm たちは、人間よりはるかに高い理性と徳を持っており、彼らには法律の意味が理解できず、Houyhnhnm にコモン・ローなどのイギリス人の習慣を説明するガリヴァーはそれらについての批判を隠さない。ガリヴァーは Houyhnhnm に憧れますが、結局、馬の国を追放されてしまう。そして海を漂流しているところをまた船に助けられるのだが、すっかり人間嫌いになっているガリヴァーは、船から逃げ出そうとして縛り上げられてしまう。そしてガリヴァーはドン・ペドロ船長に馬の国について語る。船長は、はじめはガリヴァーの話を信じないが、そのうちに受け入れる。しかし、この時ガリヴァーはこれまでの航海とは異なり、証拠を提示していない。一体なぜ船長はガリヴァーの話を受け入れるのだろうか。スウィフト以外の手が入った 1726 年版の『ガリヴァー旅行記』では、船長がガリヴァーの話を信じたのは、オランダ人から似たような話を聞いたことがあったからだということになっているが、1735 年版の『ガリヴァー旅行記』では、この下りは削除されている。つまり、1726 年版では、「証言のゲーム」がギリギリ成立する可能性があるが、1735 年版では、「証言のゲーム」は完全に成立しない。ここで小人の国と巨人の国では、ガリヴァーを救ったのはイングランドの船でしたが、今回はポルトガルの船になっていることに注目すればドン・ペドロ船長はイングランド的な「事実」の文化の外側に位置する人物として、証拠のないガリヴァーの話を受け入れるのではないのでしょうか。あるいは、馬の国は現実でなくとも、彼の人間嫌いは真実だ、と考えることも可能である。ガリヴァーは乗組員に裏切られており、それ自体はあり得そうな話であるので、ドン・ペドロ船長は、馬の国の実在を信じたのではなく、彼の人間嫌いに正当な理由があることを信じたのではないだろうか。人間を嫌い、錯乱するガリヴァー自身がいわば「生ける証拠」となって、ドン・ペドロ船長に彼の話を受け入れさせたのだ。つまり、ガリヴァーが憧れるような法なきユートピアは現実ではないが、イングランドの法に問題があることは事実だ、と解釈できる。1726 年版では、人間嫌い、法批判の正当性とユートピアの実在が混同されてしまうために、この部分は削除されたのではないか。

『ガリヴァー旅行記』は法をモデルとした目撃を重視する当時のイングランドの文化を批判し、何が事実かを判定する私たち読者の基準を混乱させる。しかし、見ることが信じられないなら私たちは一体どのように物事を判断すれば良いだろうか。私たち読者はガリヴァーの狂気を見ることによって、自分の正気を疑うことを強いられるのだ。スウィフトは法律のないユートピアが確実に存在する、という嘘は言わず、現実の複雑さ、理想的な国とは何か、そしてそれが実現できるかどうかについて、私たち読者に自ら思考させようとしているのではないだろうか。

参考文献

原田範行、服部典之、武田将明、『「ガリヴァー旅行記」徹底注釈 注釈篇』、岩波書店、2013 年
松村一志、『エビデンスの社会学 証言の消滅と真理の現在』、青土社、2021 年

Shapin, Steven and Simon Schaffer. *Leviathan and the Air-Pump: Hobbes, Boyle and the Experimental Life* 1985. Princeton UP, 2011